

『ルーツ』の風景

神 野 尚

ROOTS Scape

Hisashi JINNO

Abstract

This time I take up *Roots* (1976), the saga of an American family, in which Alex Haley traced his family to its deepest roots, back to his African ancestors. When he was a boy in Henning, Tennessee, Haley's grandmother used to tell him stories about their family — stories that went back to her grandparents, and their grandparents, down through the generations all the way to a man she called “the African.” Still vividly remembering the stories after he grew up and became a writer, Haley, who had carried on the dying wishes of Malcolm X that he wanted to refashion the broken strands between the American Negroes and African culture, began to search for documentation that might authenticate the narrative. It took ten years and a half a million miles of travel across three continents to find it, but finally, in an astonishing feat of genealogical detective work, he discovered not only the name of “the African” — Kunta Kinte — but the precise location of Juffure, the very village in The Gambia, West Africa, from which he was abducted in 1767 at the age of sixteen and taken on the Lord Ligonier to Maryland and sold to a Virginia planter. This paper aims at going deep into the born episodes of *Roots* together with Haley's life full of vicissitudes.

1

Had it only been fifteen years? The last time I'd sat here in a pew at the New Hope Church, early in 1977, the entire town of Henning, Tennessee, had turned out to honor its most celebrated citizen, who had just written a book called *Roots*. It seemed a lifetime ago, and now it was over. Along with all of those who knew and loved him best,

平成16年2月26日 原稿受理
大阪産業大学 教養部 非常勤講師

I had returned to bury Alex Haley.

ここに一冊の本がある。題して『アレックス・ヘイリー：プレイボーイ・インタビューズ』(*Alex Haley: The Playboy Interviews*, 1993)。編者は、「プレイボーイ・インタビュー」の頃から『ルーツ』(*Roots*, 1976)の執筆までずっとアレックス・ヘイリー (Alex Haley, 1921~92) とともに仕事で苦楽をともにしてきた人物マレー・フィッシャー (Murray Fisher) である。前掲の英文は編者フィッシャーが同書に寄せた「序文」の冒頭の一節である。

それは1977年の初めのことであった。フィッシャーはテネシー州の小さな町ヘニングにあるニューホープ教会の会衆席に座っていた。アメリカ黒人の象徴的な大河小説^{サガ}を書き終え、この町で最も有名になった市民ヘイリーの栄誉を称えるためであった。あれから15年。ヘニングはもとよりアメリカ中で、いや世界的に有名になったこの人物を最もよく知り、心から愛していた人たちとともに、再び彼はこの町に戻ってきた。今回はヘイリーを埋葬するためである。

1992年2月10日のワシントン発 AP 伝は、ヘイリーの訃報をこう伝えている。

「米国の一黒人家族の源をアフリカにまでたどった叙事詩的作品『ルーツ』で1977年のピューリッツァー賞を受賞した米国の作家、アレックス・ヘイリー氏が10日未明、米ワシントン州シアトルの病院で死去した。70歳だった。

ヘイリー氏は、1921年11月、ニューヨーク州イサカ生まれ。テネシー州ヘニングで育った。『マルコムX自伝』の著者としても知られる¹⁾」

以下、フィッシャーの「序文²⁾」をもとに、アレックス・ヘイリーがたどった人生航路を紹介する。

かつてアレックスは家族の厄介者と思われていた。彼の両親はヘイリー家で最初に大学教育を受けた世代で、子供たちにもひとかどの人物に育ててほしいと思っていた。アレックスにはジョージとジュリアスという二人の弟と、ロイスという妹(異母妹)が一人いた。ジョージは弁護士、ジュリアスは建築家、ロイスは音楽教師となった。ところが、生来、夢想家で、放浪癖のあったアレックスは、両親の期待に反して、こともあろうに沿岸警備隊に入隊

1) 『毎日新聞』1992年2月11日。

2) Fisher, Murray, ed., *Alex Haley: The Playboy Interviews*, New York: Ballantine Books, 1993. フィッシャー編、住友進訳『アレックス・ヘイリー：プレイボーイ・インタビューズ』中央アート出版社、1998年。

し、炊事兵になったのである。

彼は海上での暇つぶしのため、むさぼるように本を読み、シラノ (Cyrano)³⁾ のように水兵仲間のラブレターを代筆しては、小遣い金を稼いでいた。上陸休暇から戻ってきて、ラブレターの反応を話す水兵たちの興奮した姿に触発された彼は、真実告白雑誌に物語の投稿を始めるようになった。だが、原稿はなかなか採用されなかった。4年の歳月が経過し、その間、謄写版刷りの不採用通知がうずたかく積まれていた。そうしたある日、投稿原稿が一部返送されてきた。それには「素晴らしい試みです」と書かれた手書きのメモが添えられていた。その時の気持ちを、アレックスはフィッシャーにこう語っている。

“That was the most exciting day of my life. It was the only encouragement I'd ever received since the day I'd started writing four years before, but it was all I needed. I went back to work and four years later, I finally made a sale.”

20年間勤務した沿岸警備隊を退役した後、アレックスはプロの作家になる夢を抱いて、“飢え死にを覚悟で”グリニッチビレッジに引っ越した。事実、餓死寸前になった経験がある。“18セントとイワシの缶詰2缶”だけの生活状態にまで転落していた時、彼のもとに雑誌社から小額の小切手を送られてきた。これで、誘いを受けたばかりの公務員の仕事を断ることができた。男性向けの冒険雑誌でじっくり腕を磨き、やがて『リーダーズ・ダイジェスト』、『サタデー・イブニング・ポスト』に移って健筆をふるい、ついに1962年、すでに有力な全国誌として、不動の地位を確立していた『プレイボーイ』へと飛躍していった。

1962年の初め、『プレイボーイ』の創刊者ヒュー・ヘフナーは新しい月間の特集として「プレイボーイ・インタビュー」を企画した。インタビュアーはアレックス・ヘイリー、最初の対談相手はマイルス・デイヴィス (Miles Davis) に決定した。

マイルス・デイヴィスといえば、テクニク、フィーリングのいずれを取っても抜群のトランペット奏者であり、モダン・ジャズ界でも指折りの強烈な刺激を与えてくれる人物だ。だが彼はレポーターに喧嘩腰の態度を取ることで有名だった。そこで、インタビューをするに当たって、この敵意を取り除こうと、アレックスはマイルスの家にあるジムのリングに上り、ボクシングのスパーリング・パートナー (練習相手) を2, 3ラウンド務めた。1962年9月にインタビュー記事が雑誌に掲載されると、世の中はそれこそ蜂の巣をつついたように

3) フランスの劇作家エドモン・ロスタンの5幕韻文戯曲。主人公の軍の幹部候補生の豪傑で大鼻のシラノは、ひそかに恋する従姉妹ロクサーヌの恋の仲介を美男のクリスチャンに頼まれ、恋文を代筆してやる (同上書「序文」訳注による)。

大騒ぎとなった。このインタビューは、ジャズへの洞察というよりも、むしろアメリカ白人の人種差別主義についての痛烈な観察が印象に残るものであった。

次の相手は「ネイション・オブ・イスラム」(The Nation of Islam)の気性の激しい聖職者マルカム X (Malcolm X) だった。アレックスはマルカムからあからさまに不信の念をぶつけられ、厳しい試練に立たされた。少しずつ心を開いてくれるようになるまで、マルカムはアレックスを“白人雑誌”のおべっか使いとって小馬鹿にして、ののしったり、政府から会話を盗聴されているのではないかと疑ぐったりしていた。だが、次に驚かされることになるのはマルカムの方だった。1963年5月、内容が過激過ぎ、発表されるはずがないと思っていたインタビューが、なんと『プレイボーイ』に掲載されていたからだ。インタビューの中身は劇薬さながらで、“白い悪魔(白人)”に対する憎しみで煮えたぎっていた。記事を読んだ読者の大半は、腰を抜かし、激しい怒りで身を震わせた。しかし、インタビューの目的は、嫌悪を催させるような発言でも、きちんと発表し、世の中に問題を喚起することこそあったのである。

このインタビューから一年後、マルカムは今までとは違う新しい自分を見つけ出そうと、中東を旅していた。彼はイスラム教の聖地メッカからフィッシャー宛に絵ハガキを送ってきた。それにはこう記されていた。

“The friendship of people like yourself gives me hope that black and white can learn to live in peace.”

彼が凶弾に倒れるのは、それから10カ月後のことであった。

1964年の夏、マルカムがまだ海外にいる間、アレックスは3人目の相手カシアス・クレイ(Cassius Clay)とのインタビューを依頼された。彼はまだモハメド・アリ(Muhammad Ali)と改名していなかったが、ヘビー級タイトルマッチでソニー・リストンを破った翌日、ブラック・モスLEM (Black Muslim) への改宗を公にしていた。当時、モスLEMの「御使者」イライジャ・ムハメド(Elijah Muhammad)とマルカムの間の亀裂は深まっていたが、カシアスはそんなことは一向に気にせず、マルカムと彼の妻ベティをマイアミの試合に招待していた。兩人ともお互いの生き方を尊重しあっていた。マルカムとカシアスというニューヨークのこれらふたりのプリンスが、前者は中古のセダン、後者はお抱え運転手付きのリムジンに乗ってハレームの通りを走りながら、活動している姿を、アレックスは目撃している。1964年10月、カシアスのインタビューが雑誌に掲載されると、再び読者から手紙が殺到し始めた。その中には『プレイボーイ』のインタビューは、白人種に対する共産主義者の国際的

陰謀だ、と非難する人種差別主義者からの投書もあった。

アレックスの4人目のインタビューの相手を知ると、非難を浴びせていた人たちは、自分の疑っていたことが本当だったことを確信したに違いない。対談相手はドクター・マーチン・ルーサー・キング・ジュニア (Dr. Martin Luther King, Jr.) だったからだ。キング牧師はバプティスト (浸礼教徒) なので、ヌード写真の満載された『プレイボーイ』からの依頼を受け入れさせるには一苦労も二苦労もするだろうと予測し、アレックスはフィッシャーのアドバイスもあって、インタビューの交渉材料として、一度聞いたら耳から離れなくなる雑誌の販売部数 (当時300万部以上) を利用した。彼はキング牧師の顧問に読者の人口統計分析の結果を見せた。それによると『プレイボーイ』の読者は大学教育を受けた若い男女であった。この読者層はキングのような何らかの主義主張を持つ者にとっては最も大切な年齢の人たちである。女性のヌード写真のことはともかくとして、この読者層は無視できない。キングの顧問は納得した。

しかし、アレックスの本当の苦労は、インタビューの承認を受けた後、待ち受けていた。キングは何時間も記録用テープが必要な『プレイボーイ』のインタビューはおろか、ありきたりの質問にさえ答えられないほど多忙をきわめ、何度か約束はキャンセルされた。アトランタに三度も足を運んだが、相変わらずキングに会えなかった。だが、キングの女性秘書と何とか親しくなれたアレックスは、彼女の計らいで、キングが出席する教会のバーベキュー・パーティーに出席した。そこで彼はキングと顔を合わせ、事務所で会話をすることになった。

このちょっとしたお喋りは夜遅くまで延び、さらに、この会話は次の数週間にまで及ぶことになった。アレックスは『マルカム X 自伝』 (*The Autobiography of Malcolm X*, 1965) の原稿の手直しのため、ちょうどマルカムと仕事をしている最中だった。キング牧師とマルカム X は人前では仇敵同士のようにであったが、心の中では互いに惹かれ合うものがあり、過去最長のインタビューが1965年1月に雑誌に公表された後も、キングは“ブラザー・マルカム”が自分のことを何と知っているかアレックスに尋ねてきた。マルカムの方も、マーチンを穏健な人物に見せるためには、自分のような過激な人間が必要なんだ、と口癖にしていた。

アレックスの5人目の対談相手は「サンフランシスコ弁護士会の狂気の天才」……「裁判所の道化師」……「目立ちたがり屋のインチキ弁護士」等の異名を持つサンフランシスコの弁護士メルヴィン・ムーロン・ベリー (Melvin Mouron Belli) であった。彼は医療事故の訴訟等で手腕を発揮し、このインタビュー (1965年6月) にも登場するケネディ大統領暗殺犯オズワルドを殺害したジャック・ルビー、エロール・フリンの他、メイ・ウェスト、トニー・カーチス、レニー・ブルース、ティナ・ターナー、ローリング・ストーンズ等の有名人の弁護士を務め、マスコミに注目された人物である。ベリーはインタビュアー、アレックス

を「とても優れた人物だ。これまで出会った人物の中でも指折りの物腰が柔らかく、親切で、まっとうな人物だった」と評している。

アレックスは極右という人種の立場が全く正反対の人物とインタビューした時、今までで一番異様な体験を味わった。1966年4月彼は自称アメリカ・ナチ党総統にして、白人優越主義と非妥協的反ユダヤ主義の救世主ジョージ・リンカーン・ロックウェル（George Lincoln Rockwell）と対談した。この取材の狙いは、敵意に満ちたロックウェルを挑発し、狂気じみた人種差別主義の中身を白日のもとにさらけ出すことであった。アレックスがインタビューを申し込むため電話をかけると、向こうはお前はユダヤ人かと詰問してきた。アレックスは違うと答えた。でも彼は黒人だとは付け加えなかった。ヴァージニア州アーリントンにあるナチ党本部前に到着したタクシーから出てきたアレックスが黒人だとわかると、ロックウェルの“突撃隊員”たちは啞然とすると同時に憤慨した。が、その後、番犬のドーベルマンと鉤十字の旗の前を通って、建物の内部にあるロックウェルの私室に案内された。そこには彼がアドルフ・ヒトラーの肖像画の下で芝居がかった姿勢で立っていた。アレックスを迎えたロックウェルは、にこりともせず、握手も求めてこなかった。椅子を勧められて座ったが、“司令官”の椅子の肘掛けには柄に真珠を埋め込んだ拳銃がアレックスに狙いを定めるように置かれていた。こうしてインタビューが始まった。「悪く思わないでほしいが、あんたたちと交わるつもりはないんだ。われわれは君たちの人種のことを黒ん坊と呼んでいる」とロックウェルは口にした。すると、アレックスはすかさず「司令官、僕は何度もニガーと呼ばれてきましたが、そういわれてお金がもらえるのは初めてのことです。話を進めてください」と愛想よく切り返した。この最初の言葉のやり取りが、ふたりの間にすばらしい関係を結びかけとなった。この呆気にとられるインタビューの間中ずっと、ふたりは激しい言葉を交わしていたが、終了する頃には、ロックウェルはアレックスにしぶしぶながら敬意を示していた。その後、このナチ党の指導者はアレックスと手紙のやり取りをするようになった。手紙の宛名には「アレックス・ヘイリー、VIN [最重要黒人]」と記してあり、『プレイボーイ』のインタビュアーという世界を股に掛けた生活をしていることを大変羨ましがるところも見せた。だが、このインタビュー記事が発表されて一年後、ロックウェルは暗殺者の銃弾に倒れた。「プレイボーイ・インタビュー」の対談相手としては、マルカムX、キング牧師につづいて3人目の犠牲者となった。

“When the word got around, it became a bit difficult to line up new interviews.”

「プレイボーイ・インタビュー」が評判になるにつれて、新しいインタビュー相手を確保

するのが困難な状況になってきた時、アレックスはそうやって、しかめっ面をして見せた。しかし、実際は違う。それどころか、アレックスにインタビューしてもらうことが、有名人の間ではいってみれば武勲のようになっていたのだ。アレックス自身がちょっとした有名人になっていたこともあるが、それは彼のインタビューのやり方や人柄によるところが大きかった。スターがジャーナリストに警戒心を抱くのも無理のないことだ。しかし、アレックスの相手をした人物は例外なく今までで、もっとも完璧で、公平で、意義のある最高のインタビューを受けたと話し、多くがアレックスと終生の友となった。

7人目の対談相手はアレックスの親友サミー・デイヴィス・ジュニア (Sammy Davis, Jr.) である (1966年12月インタビュー)。彼は1950年頃からダンス、歌、声帯模写等でメジャー・シーンに登場し、以後、数々のミュージカル、映画にも出演した。アメリカ最高のエンターテイナーとして活躍していたが、1990年に他界した。サミーが亡くなって、つらい数カ月を過ごしていた未亡人のアルトヴァイズと息子マニーが、アレックスと一緒にいて、慰めてほしいと頼んできたほど、アレックスとサミーの関係は親密なものであった。

サミーのような“史上最高のエンターテイナー”とのインタビューを実現させるのは至難の技であった。アレックスが超多忙なこの大スターをキャッチできたのは、サミーがフィラデルフィアにあるフォレスト劇場と契約している期間のことだった。アレックスはその時の体験を次のように述べている。

“I had been trying to get his ear, and his confidence, for two weeks, dogging his tracks from city to city, trying to penetrate both his shell of reticence and the cordon of cronies and co-workers with whom he surrounds himself, waiting in vain for Sammy to alight anywhere long enough to buttonhole him for anything more than a wave and a greeting. Genuinely apologetic, he finally took me aside and vowed that somehow he’ d make time for me in Philadelphia. He was as good as his word; but it was still an uphill battle.”

8人目のインタビュー相手として白羽の矢が立ったのはテレビ最大の司会者ジョニー・カーソン (Johnny Carson) だ。彼はラジオ局のアナウンサー、テレビのクイズ番組の司会者などを経た後、1962年NBC テレビ『トゥナイト・ショー』のホストとなった。有名ゲストを相手に軽妙なジョークをまじえた司会ぶりは、中産階級を中心に多くの人々の共感を得てきたが、1992年、30年続いた同番組から惜しくも引退した。

ジョニーはマスコミ嫌いで有名だが、その彼でさえ、アレックスの飾り気のない暖かな人

柄に心を開いた。1967年12月にインタビューを受けてかなりの歳月が経った時、ジョニーが司会をしていた『トゥナイト・ショー』に、『ルーツ』を出版したアレックスがゲスト出演することになった。その夜、アレックスは事前に何も知らせず、1770年代まで遡るカーソン家の家系図をプレゼントすると、あのクールな司会者は感動し、涙を流した。ヘイリーがこの世を去った年の秋、カーソンはフィッシャーにこう打ち明けている。

“I’ll never forget it. It’s still sitting behind me right here in my study.”

インタビューはカーソンの家とNBCのオフィスで一週間、毎日実施された。相手はなにしろ「冷血漢」という、うれしくない評判を頂戴している人物だ。ところが、アレックスの取材が始まると、あのレポーター嫌いだったジョニーがしだいに重い口を開くようになり、過去に受けたインタビューとは比べ物にならないほど率直に質問に応じてくれた。アレックスは次のように報告している。

“At first he was evasive, but by the end of our talks, I had come to like and respect him as a man with the guts to be stubborn about his convictions in a profession where the most common concern is to swing with the ‘in’ crowd, whatever the personal compromise.”

アレックスの60年代最後のインタビュー相手は、フットボール界の偉大な英雄で後に映画俳優に転身したジム・ブラウン (Jim Brown) だった (1968年2月インタビュー)。プロフットボールのフルバックの中でも、ジムは伝説に残る選手であり、今でも他のフルバック選手全員の能力を判断する基準となっている。身長188センチ、体重104キロの彼は、今までで最もパワフルで、敏捷なランニングバックだ。がっしりした首、鋼のような腕、大半の男性のウエストより太い太股をした彼が走ると、タックルした選手も一緒に引きずられてしまう。腕をびんと伸ばして相手をおしのけたり、フェイントをかけて相手をおかすと、稲妻のようなスピードで、あっという間に敵を引き離していく。クリーヴランド・ブラウンズで選手生活を送った9シーズンの間、持ち前の体力と目を見張る敏捷性——そして勝利に対するあくなき執念——で、NFL (アメリカンフットボールリーグ) に15の記録を樹立した。スポーツ記者も、簡単に、またすぐには破られることのない記録であることを認めている。1966年、映画俳優に転じ、人種闘争に積極的に参加するため、プロフットボール界から突然引退してしまう前、ジムは敵を粉砕して突き進み、生涯タッチダウン数126回、獲得ヤード数9シー

ズン中8度のリーグトップ、現役期間中に1万2312ヤードのランを積み重ねるほど、前代未聞の記録を打ち立ててきた。

なかなか人を褒めないブラウンも、アレックスのインタビューのやり方を見て信頼できる人間だと感じている。そして、黒人の歴史を真剣に学ぶ学生の必読書としてすでに定評のある『マルカムX自伝』を執筆し、マルカムXを不滅の人物にしてくれた、尊敬できる人物としてアレックスを記憶に留めている。

2

しばらくすると、アレックス本人が歴史を作ることになった。『マルカムX自伝』に次ぐ二作目の作品の構想の実現に向けて着手した。その成果が、ご存じ『ルーツ』である。

以下は、アレックスがテネシー州ヘニングに住んでいた幼い頃のエピソードである。両親とともに、母方の祖母の家に住んでいた彼は、ポーチのロッキングチェアに座る祖母シンシアの後ろに腰を下ろし、祖母たちが語る家族の話に耳を傾けていた。シンシアの祖父“チキン・ジョージ”という闘鶏士のことが話題になっていた。奴隷解放後、自由民となったジョージは、土壌が肥沃なため「豚のしっぽを植えれば、豚が生えてくる」とまで噂される“約束の地”テネシーについての土産話を持って旅から戻ってきた。おばあちゃんたちはチキン・ジョージの息子トム・マレーの話もしていた。このトムが妻と8人の子供を連れ、奴隷として生活を送っていたノースカロライナ州アラマンス郡の農園^{プランテーション}を離れ、ヘニングで新生活を始めたのである。チキン・ジョージは自分の母親キジーのことや、“お屋敷”の料理人だった祖母ベルのこともトムに伝えていた。トムも子供ができると、必ずジョージに話してもらった祖先の話をしたものだった。しかし、アレックスが話の中で最も引き込まれ、神秘的に感じたのは、キジーの父で、“アフリカン（アフリカ人）”と呼ばれる人物だった。

ヘイリー家200年の系譜の中で“最も古い祖先”であるアフリカ人は、ある日、太鼓の材料となる木を切りに、村からさほど離れていない森に出かけた時、4人の男に襲われ、殴られ、鎖に縛られ、拉致されて奴隷になったのだ、と娘キジーに話した。彼は大西洋を横断し、“ナプリス（アナポリス）”という所に連れてこられた。最初の主人の農園で4度逃亡を試みたが失敗し、罰として足を切り取られてしまった。アフリカ人は主人がつけたトビーという奴隷名で呼ばれるのを拒み、本名で呼んでくれるよう訴えた。「キンテイ」がその名だった。キジーが成長していく時、彼はアフリカで喋っていた母国語をいくつか教えていった。その言葉はキジーからジョージ、ジョージからトム、トムからシンシア、そしてシンシアからアレックスへと伝えられた。

この途切れることのない記憶の鎖について、アレックスはかつてフィッシャーにこう話し

た。

That unbroken chain of memory was a priceless repository, and possibly also unique, Alex told me, because as far as he knew, there were no black families in America who could trace their lineage that far back. If he could find some way to decipher those scraps of words, he might be able to open the door to his own past by enabling him to trace “Kin-tay” back to Africa. If he was successful, he would also rediscover the past for 25 million other black Americans. He would be able to reclaim the rich cultural heritage that slavery took away from them, along with their names and their identities.

アレックスのこの想いは生前はたせなかったマルカムXの遺志でもあった。マルカムは最後まで、アメリカ黒人とアフリカ文化の断絶してしまったつながりを、回復しようと努めていた。彼は、そのことの中にこそ、新しい人種連帯感への道を見、また、歴史的役割の自覚への道、そして何よりもまず、白人によって破壊されてしまったと彼の主張する、黒人がみずからの人間的価値を知ることへの道がある、と考えていたのである。

まさしくマルカムの遺志をついだアレックスは、みずからのルーツ探しの旅に取り憑かれてしまった。このいつ終わるとも知れぬ探求のため、彼は三つの大陸を横断する、何十マイルもの旅に出ることになった。西アフリカのガンビアの海岸から川を4日遡ったところにあるわらぶき屋根の小屋が散在する村で、彼は部族のグリオ（語り部）の話から、村で一番有名だったキンテー族の5代目の祖先が、「ある日、森に木を切りに行ってから、姿が見えなくなった」ことを知った。さらに、古い船舶記録と積荷目録から、アレックスは17歳の少年クンタ・キンテをアメリカに乗せていった奴隷船の船名だけでなく、船がアナポリスに入港した日付まで突き止めた。1767年9月29日だった。その日から数えて、ちょうど200年目に当たる日、アレックスは栈橋に立って、視線をじっと海に注いだ。トゥボブ・クーミー（toubabo-koumi）と呼ばれる白い肌をした人喰い人種が住むと伝えられる伝説の地に、クンタが到着した瞬間の心境を追体験するためだ。

探求はそれから数年間つづいた。奴隷船に鎖で繋がれ、船倉に横たわっていた時、祖先はどのような苦悩を味わったのだろう。そう考えたアレックスは、この苦しみを身をもって体験してみようと、パンツ一枚になって外洋を航行する貨物船のゴツゴツした船倉の床に幾晩も横たわった。こうしてやっと、記憶に焼きつくほどありありと、この感覚をつかみ取った。

構想から実に12年の歳月を経て、ついに『ルーツ』は完成した。1976年というアメリカ建

国200年目に当たる記念すべき年であった。『ルーツ』はベストセラー・リストのトップに躍り出た。本を原作にした12時間のテレビ・ミニシリーズが1977年1月、8夜連続で放映されると、『ルーツ』はいわゆる国家現象になった。放映された週は、1億3千万人ものひとがテレビにかじりついて外出しなかったため、劇場やレストランはがらがらになった。テレビ放映と同時に、本の売り上げも急上昇し、ハードカバーとペーパーバックを合わせ、550万部を突破した。『ルーツ』は37カ国語で出版され、世界中の批評家から賛辞を得た。以下は、その二例である。

“among the most important books of the century”

“*Roots* forever altered America’s perceptions of itself and its past.”

『ルーツ』が出版される前の1976年10月、『プレイボーイ』誌は、特に読者の興味をひきつける部分を抜粋して「ルーツ：血の交わり」(Roots: The Mixing of the Blood)というタイトルで掲載した。3カ月後、アレックスは一転して今度は『プレイボーイ』からインタビューを受ける側に回った。このインタビュー(1977年1月)はそれまで『プレイボーイ』に発表された中で、最も好感をもって迎えられることとなった。

1977年のピューリッツァー賞につづいて、アレックスに全米図書賞を含む数々の賞や学位が授与された。彼は世界で最も有名な作家となり、崇拜の対象にされた。彼は読者からの恩恵に浴していたが、そのためいつしかプライバシー以上のものを失なうことになった。「有名になるのは1カ月に一度で十分だ」と彼はフィッシャーに語っている。アレックスは自分の一族の歴史はもう自分だけのものではなく、「すべての人の共有財産になった」と口癖のように話していた。出版後、数年間、彼は世界中の都市で講演し、なんと一日平均5千人ものひとに話しかけるほどのハードなものであった。金を無心する者もいれば、親戚を名乗る者もいた。また、奴隷制度やプランテーションに関するあまり知られていない本の著者から、盗作だと訴えられるようにもなった。

1979年3月、アレックスは『プレイボーイ』誌に「有名にならなければよかったと思う日もある」(There Are Days When I Wish It Hadn't Happened)という文章を書いた。その中で彼は、有名になったばかりに、失ってしまった大事なものについて、痛切な思いを吐露している。1990年7月には、『プレイボーイ』のインタビュアーを辞めて以来、久しぶりに旧友クインシー・ジョーンズ(Quincy Jones)にインタビューしている。1933年シカゴで生まれたクインシーは、ソングライター、アレンジャー、レコード・プロデューサーとして、

ポピュラー・ミュージック・シーンに多大な影響を与えている。音楽史上最大のヒットになったアルバム『スリラー』や、スーパースターが一堂に会し、飢餓救済のため5千万ドルを集めた『ウイ・アー・ザ・ワールド』で有名。映画音楽も数10本手がけ、『冷血』『夜の大捜査線』等が有名。ジョージ・ベンソン、マイケル・ジャクソン等のミュージシャンをプロデュースしている。

クインシーは、アレックスが『ルーツ』を書いていた1975年、初めて顔を合わせ、アレックスが語る祖先の物語に引きつけられていた。デイヴィッド・ウォルパーがテレビのミニシリーズ用に最初の12時間分の音楽を依頼した時、アレックスとの間に協力関係と友情が芽生えた。今回のインタビューを依頼された時、アレックスはちょうど待望の私的回想記『ヘニング』(*Henning*)の最後の追い込みに入っていた。しかし、この特別掲載の「プレイボーイ・インタビュー」に時間を割くことを引き受けたのは、ふたりの間に深い友情が培われていたからに他ならない。その豊かに織り上げられた会話は、かつての名インタビュアーぶりを彷彿させる。

1992年7月には、『プレイボーイ』誌への最後の寄稿となった「回想のマルカムX」(*Malcolm X Remembered*)を書いている。この作品はアレックスの初めての本(『マルカムX自伝』)について書かれた感動的な回顧録であり、彼が生前に発表した最後の文章ともなった。ちょうどスパイク・リー監督が『マルカムX自伝』を原作にした、マルカムの生涯に関する不朽の叙事詩を製作している最中に書かれたものだ。映画がヒットしたため、このマルカムとの共著は、27年前に出版した時より売れ、1992年だけで100万部を突破した。この売れ行きこそまさに、マルカムとアレックスのふたりを称えるのにふさわしい贈り物であった。

最後までアレックスは、ひとり静かに落ち着いて物を書くため、貨物船に乗ってずっと長旅を続けた。旅行にいつも携えていたふたつの重い鞆のひとつには調査記録がいっぱい詰まり、もうひとつには「4カ月から半年」で仕上げる予定でいた、未完成の原稿が入っていた。しかし、生前、彼が目にするのができたのは、1988年に出版された『北極星をめざして』(*A Different Kind of Christmas*)だけであった。

『北極星をめざして』は『ルーツ』以後、12年間の沈黙を破って出版された作品で、小説のカテゴリーではアレックスの第二作目のものである。この本のジャケットの折り返しには、こう書かれている。

Alex Haley's *Roots* is one of the world's most beloved and important books. In *A Different Kind of Christmas*, the intense drama of a white Southerner and a black slave who work toward a mutual goal, Haley once again gives us a moving story of physical

and moral courage, and an unforgettable tale of spiritual regeneration. Rendered with a matchless sense of time and place, a poetic humanness, and a rich, robust humor, *A Different Kind of Christmas* will delight and inspire readers of all ages and faiths for generations to come.

『北極星をめざして』は一口にいて、『ルーツ』と同様、奴隷制度の問題がテーマである。だが主人公は黒人ではなく、南部の白人の大学生で、『ルーツ』とは全く逆になっている。時は1855年、舞台は主として、ノースカロライナ州のアッシュ郡とペンシルヴェニア州のフィラデルフィア。

ノースカロライナ州の大農園主のひとり息子で北部のニュージャージー大学（プリンストン大学の旧名）の学生フレッチャー・ランドールはクエーカー教徒の学友に感化され、それが契機となって「自由」を獲得したいと強く願う黒人奴隷の逃亡を援助するための非合法組織「地下鉄道」と「ヴィジランス・コミティ」（自警団）の献身的な活動に接し、煩悶の末にそれまで抱いていた差別意識を克服し、進んでその組織に加入する。そして自分の周囲の黒人奴隷の逃亡を助けようとしたために、1855年のクリスマス・イヴの夜、ついに悲劇的な運命におちいるという筋書である。このように、この小説は黒人奴隷の「自由」への逃亡を手助けする南部の白人青年の勇気と精神的な生まれ変わりを見事に描いた作品だ。

死ぬ前の数カ月間、アレックスは『ルーツ』の続編を書いていた。1700年代のアイランドまで遡る、自分の父方の祖母の生涯をテーマにした大河小説『クイーン』（*Queen*, 1993）がそれである。この作品のジャケットの折り返しには、次のように書かれている。

Now, from the author of *Roots*, comes *Alex Haley's Queen* — the saga of his father's family.

Lovers of sweeping generational epics will find much to rejoice in here. Once again, this is a personal saga, but one played out against the broad canvas of American history. The story begins in Ireland, where Haley's white great-great-grandfather, James Jackson, Sr., is born. From there we travel with Jackson to Nashville, where he meets Andrew Jackson, the future president of the United States. The two men become business partners, and James Jackson makes his fortune. He establishes his grand plantation, The Forks of Cypress, in Alabama, while Andrew ascends to the White House, and the rumblings that will explode into the Civil War gather force.

James's son Jass Jackson inherits the plantation just as the genteel, well-ordered

antebellum world begins to crumble. His adolescent attraction to the beautiful and strong-willed slave named Easter blossoms into a powerful and lasting love, and from their passionate union comes Queen — the heroine of the tale, Alex Haley's grandmother.

This is history at its most compelling — from the Irish sod to the settlement of the South ; from the Trail of Tears to the battlefield at Manassas ; from the agonies of slavery to the tribulations of freedom — all rendered with the eye for telling detail and the sense of historical significance that readers have come to expect of Haley. In this, his final book, Alex Haley has created a truly multicultural family saga, the capstone to one of the great, classic American stories.

1992年2月10日、アレックスはシアトルのアパートで心臓発作に襲われ、この世を去った。そして翌1993年、この長大な、思いがけぬ遺作『クイーン』が発表されたが、作品誕生前後の事情を同年2月14日付『ニューヨーク・タイムズ』は、おおむね次のように報じている。

『ルーツ』で巨万の富を手に入れたアレックス・ヘイリーだったが、その後、不動産投機の失敗やら、無心や援助を断れぬ人のよさやらで、いつしか莫大な借金をこしらえていた。ひとつにはその清算のためもあって、小説家は次作品の執筆とテレビドラマ化を思い立った。しかし、金銭的な負債のほか、彼にはいまひとつの借りがあった。それは本書最後の登場人物である亡父サイモン・ヘイリーにたいしてだった。かねて父は息子のアレックスに、今度は父方の系図をたどること、わけても祖母クイーンの世界を書くことをしきりにすすめていた。アレックスも子どものころから祖母と、彼女の白い父親であるジャクソン大佐のことは、時につけ折りにふれきかされていた。たまたま講演旅行でアラバマ州フローレンスをおとずれたとき、フォークス・オブ・サイプレスの邸内墓地に詣で、そこでジャクソンの白人の子孫に出くわしたのも、幸運な偶然であり、執筆の決定的なきっかけとなった。それで本格的に『クイーン』の準備にとりかかった。『ルーツ』の成功からちょうど10年目のことである。

そして6年後、タイトルからすると本書第2部の原型といったものだろうか、『混血』と題するクイーンの世界と、他にほぼ完成した2作、計3冊の本の出版契約をとりかわす日取りが決まった。同時にテレビ化の計画も煮詰まって、出版契約を2週間後に控えた一日、アレックス・ヘイリーはプロデューサーおよび監督と昼食をともにして、ミニシリーズ制作の正式決定をよろこび、めでたく祝杯をあげたあと、その日のうちに心臓発作で急

逝した。ふたつの借りを清算するはずだった『クイーン』の本もテレビドラマも、こうしておおむね準備ととのいながら、作者の生前には実現しなかった。原稿、私的書簡、ピューリッツァー賞のメダルを含む故人の全財産は、150万ドルの借財の穴埋めにオークションで売却された⁴⁾」

本書の共同執筆者でもあるオーストラリア人のシナリオライター、デイヴィッド・スティーヴンス (David Stevens) は、ヘイリーの思いがけぬ死の2年前から、いっしょに膨大な調査資料を渉猟しつつ、テレビドラマ『クイーン』の脚本を練りあげていた。そして死後1年たった1993年2月、完成したミニシリーズ『クイーン』は全米で放映され、23.4パーセントの平均視聴率を記録した⁵⁾。

他にも、アレックスの作品には、執筆に12年の歳月をかけながらも未完に終わった、生まれ故郷についての個人的回想記『ヘニング』がある。この作品の原稿はほぼ完成していたので、後世に残されることになったが、アレックス本人はそれが本になった姿をその目で見ることにはなかった。

アレックスの遺体は、霊柩車に乗せられて、ヘニングのニューホープ教会から2ブロック離れた埋葬地に運ばれていった。埋葬地は、現在、テネシー州の歴史建造物に指定されている祖母シンシアの住んでいた白い木造家屋の前庭だった。棺は6人の厳粛な面持ちの沿岸警備隊員に抱えられて、墓に運ばれていった。その足取りに合わせ、ダーシーキ (dashiki) と呼ばれるアフリカの部族衣装を身につけたミュージシャンが、アフリカン・フルートの物悲しげな音色を響かせ、儀式用のタムタム太鼓を叩いた。10発の銃声が遠くで鳴り響くと、棺を覆ったアメリカ国旗がゆっくりとたたまれ、未亡人マイ・ヘイリーに手渡された。

ガンビアの土とテネシー州の肥沃な土が混ぜ合わされ、墓に投げ込まれた。棺が下に降ろされる時、ふたりの黒人説教師と参列者は心を揺さぶる賛美歌「アメイジング・グレイス」(Amazing Grace) を歌った。アレックスはこの歌が大好きで、以前この歌が演奏されている時、隣に立っている白人男性に「故郷に帰りたくなるね」と話しかけていたことがあった。今、彼は故郷に戻ってきた。

70年ほど前、この地ですべてが始まり、そして、今、その幕が降ろされた。祖母のロッキングチェアの後ろで腰を下ろし、家族についてのすべての話に耳を傾けていたあのポーチから10歩ほどの場所で……。翌朝の8時、車やバスが町中を走り始めると、葬儀に招かれていなかった人々が、アレックスと最期の別れをするため姿を現し始めた。何百人もの人であっ

4) ヘイリー著、村上博基訳『クイーン』下巻、新潮社、1994年、「訳者あとがき」による。

5) 同上書「訳者あとがき」による。

た。その後、毎日、ここには多くの人を訪れてきた。黒人だけではない。アレックス・ヘイリーという人物と彼が語った物語に心を動かされた、あらゆる人種・国籍の老若男女が続々と詰めかけてきたのだ。棺の中の夫の顔を見下ろしながら、未亡人はこれ以上の表現がないほど適切に全員の気持ちを代弁する言葉を口にした。

“You have changed all of us forever, Alex. You have made us know who we truly are.”

最後に、自分なんて田舎牧師に過ぎないとよく口にする、きさくなジェシー・ジャクソン (Jesse Jackson) の言葉を引用して本稿を終えたい。

“He (Alex) made history talk. He lit up the long night of slavery. He gave our grandparents personhood. He gave *Roots* to the rootless. He reconnected the human family.”